

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷四十四第

行發日一月四年二十和昭

論叢

國民生命史觀の諸問題 經濟學博士 石川興二
貸借對照表の性質 經濟學博士 蜷川虎三

時論

臨時租稅增徴と稅制整理 法學博士 神戸正雄
生産設備擴充資金の供給と赤字公債の消化 經濟學博士 小島昌太郎

研究

中立貨幣の條件に關する一異說 經濟學士 中谷 實
全體主義的國民經濟學の基礎理論 經濟學士 白杉庄一郎
「孤立國」に於ける收獲遞減法則 經濟學士 山岡亮一

說苑

ロイツに於ける再保險の操作 經濟學士 佐波宣平
最近獨逸に於ける公債政策論 經濟學士 島 恭彦
蘇聯第一次五ヶ年計畫と貿易 經濟學士 松尾 彰

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

經濟論叢

第四十四卷 第四號 (通卷第貳百六拾貳號) 昭和十二年四月發行

論叢

國民生命史觀の諸問題

石川 興 二

一、國民生命史觀の實踐的辯證法

現代の代表的な史觀としてのマルクスの唯物辯證法史觀と、これと對立關係に於てあるヘーゲルの唯心辯證法史觀とを止揚することによつて、國民生命史觀なるものの根本的立場を國民的生命と制度との辯證法的發展の構造に於て明にした私は、こゝには先づこの辯證法の實踐的性質について考察する。

ヘーゲル史觀並にマルクス史觀に於ける辯證法は必然的辯證法である。即ち既に述べし如く、ヘーゲル史觀に於ては、神の生命は世界史の一切をその計畫によつて表現しこれとの辯證法的關係に於て自己を必然的に發展せしめ行くのである。またマルクス史觀に於ては、物的生産力との辯證法的關係に於て必然的に發展する物的生産

1) 本誌前號『國民生命史觀』參照。

關係により歴史の一切が規定され發展するのである。然るに國民的生命史觀に於ける辯證法は、かくの如き必然的なものではなく、人間的實踐的なものである。従つてこの史觀に於ては人間的實踐が基礎づけられ得る。

アリストテレスは、自然的なる成生の必然性に對し人爲的な成生の本質を、與へられたるものに於てある諸可能性の或ものを撰擇し實現するところの實踐性に於て明にしたのであるが、¹⁾ 人間的生命の發展に於てはこの實踐の本質がなければならぬのである。デイルタイは、かくの如き實踐的發展の概念を以て人間的生命の發展を規定して、次の如くに述べて居る。「總てに於て同一の本質が經過の中に働いて居る。總てに於て諸可能性の同様なる限界が、而も諸可能性の間に於ける撰擇の自由が存在する、従つて前進し得ると云ふ且つ自己の定在の漸なる可能性を實現すると云ふ美しい感情が存在する。生の經過に於けるこの内面より規定されたる聯關——それは諸變化への絶へざる進行を規定して居るものである——を私は發展 *Entwicklung* と名づける。」かくの如く人間的生命の發展に於ては、その生命が自己に於てある諸可能性の或ものを選擇し實現すると云ふ意味がなければならぬのである。かくて人間的生命の發展なるものは、ヘーゲル史觀又はマルクス史觀に於けるが如き必然的な向上發展ではあり得ない。即ちデイルタイは前述の語に續いて次の如くに述べて居る。「この概念は絶へずより高き諸段階への進行 *Fortgang zu immer höherem Stufen* と云ふ思辨的な諸空想より全く異なる。如何にもこの概念は主體に於ける明確性・分化等の増大をそれ自身に於て含んで居る。而も生の經過は、より高き意義を實現することなく、より低き生の諸領域(動植物の生の域を意味する筆者)に於けるが如く、出生と死亡との間に於ける植物的なる成長、成熟、没落の自然的基礎に結ばれて止まることも出来る。それは早く下向することも出来ればま

1) 拙著『精神科組織經濟學の基礎問題』第一一六頁參照。

た最後まで向上することも出来る」と述べて居る。このことは、人間の生命の一種としての國民的生命についても妥當するのである。即ち國民的生命なるものも、向上發展の可能性と共にまた没落の可能性を常に有して居るのであつて、その何れを實現するかによつて或は向上し或は没落するのである。而も既に述べたところより明なるが如く、既存の制度と矛盾對立の關係に陥りたる國民的生命は、この制度をより高き制度に變革することによつてのみ自己の向上の可能性を實現し得るのである。而もこのより高き制度を實現すると云ふことは、更に現存の國民的存在に於てあるは諸可能性の中よりより高き制度の成立の爲めに必要な可能性を實現することによつてのみなされ得るのである。

かくの如く國民生命史觀の實踐的辯證法に於ては、國民的生命の向上の可能性實現は、國民的存在に於てある國民制度變革の可能性の實現を相待つてはじめてなされるのである。而もこのことは、意識的に又は無意識的になされるのである。以下此等主體、客體、様態の實踐性について考察する。

二、國民生命史觀に於ける主體の實踐性

國民生命史觀に於ける發展の主體が國民的生命であることは、既に述べたところより明であるが、この國民的生命なるものは、ヘーゲル史觀に於ける民族 *Volk* なるものと區別されなければならない。ヘーゲルの世界史觀の主體は神であるが、この世界史の契機としての國民史の主體は民族 *Volk* であつた。而して「一民族には直接的自然的諸原理の一が歸屬する、即ちその民族の地理的且人間學的實存である」¹⁾ 「自然的原理としてのかゝる契

1) Dilthey, *Aufbau, Ges. Schrift.* VII. S. 245.

2) Hegel, *Rechtsphilosophie*, § 346.

機が歸屬する民族には、この原理の伸張が、世界精神の自己發展的自覺の進行に於て、委ねられて居る。」と述べて居る。また事實上ヘーゲル史觀に於ける世界史の「區分」は「世界史の地理的基礎」によつてなされて居る。かくて世界史の主體を神とすることによつて唯心的形而上學的に見えるヘーゲル史觀は、その内容を爲す現實の主體をこの「民族」とすることによつて極めて自然主義的なる史觀となり得る。こゝにも唯心論の唯物論への轉落の契機が見られる。この唯心的と唯物的との二重性を有するヘーゲルの立場は、今日の國家主義に於てもまた見られるところのものである。例へばナチスの國家主義的立場は一面精神を高調するが如くにして他面獨逸民族の血を重んじ他民族に對する排他的態度に於て生物主義に陥る。我國に於ける國家主義者について見るも、一面日本精神なるものを高調しながら、他面大和民族なるものを血的に重んじて他民族を蔑視し排斥し、且つ國民的自然領土の擴張の爲めに國民的生命をも賭せんとするに至るものが少なくない。かくの如き立場に立つて、生物的に民族を限定し民族國家の確立を求むるならば、それは自然への復古主義となる。

國民主義の立場か國民史の主體とするところの國民的生命なるものは、これと反對に、國民史の發展を通じて自己を發展完成せしめ行くところのものである。即ち國民的共同感情に結ばれる人々の共同體的な有方なるものは、國民史の發展を通じて益々自覺的に強化され行く生命であると共に、この國民史の發展を通じて益々その生命内容を十分に實現し行くのである。即ち國民史の發展なるものはこの國民的生命の自覺的強化並に實現の歴史に外ならないのである。而して民族なるものはこの國民的生命の自然的契機の一たるにすぎないのである。

即ち國民生命史觀の立場に於ては國民的生命なるものは國民的共同感情によつて共同體的に結ばれて居る人々

2) Ibid. § 247.

の生命であるが故に、多數の民族より成る亞米利加合衆國人が一國民を爲せる所以もこれに見るのである。これと反對に生物學的に民族を一にするも國民的共同感情によつて結ばれざるものは一國民ではない。我國民についてこれを見るも、それは大和民族のみより成るものではない。民族を同じくすると云ふことは、自然共同體の直接的基礎條件であらうが、國民なるものは文化共同體であつて、文化を共にする人々の共通感情が共同的表現によつて共同感情に高められ國民的共同感情によつて結ばれて居ると云ふことが本質的に必要なのである。而してこのことは國民的生命の實踐自體を通じて強化され確立し行くところのものである。

三、國民生命史觀の客體に於ける實踐的諸要因

實踐的辯證法を以て本質とするこの國民的生命なるものは、既に述べしが如く、その變革期に於てはより高き制度を實現しこの下に於て自己のより高き發展を果げるのであるが、既存の制度の末期に於てはその國民的存在の中に、このより高き制度を實現すべき諸要因が準備されて居るのである。以下このことを考察しよう。

マルクスはその史觀に於て「一の社會構成は、その形態が狹ますぎる様になるまで總ての生産諸力が發展してからでなくては決して没落せず、また新たなより高度の生産諸關係は、その物質的な存在諸條件が舊社會自體の母胎内で孕まれたるまでは、決して從來のものに取つて代りはしない。かくて人間は常に自ら解決し得る問題のみを問題とする。なぜと云ふに、よく正確にこれを觀察するならば、問題それ自體は常に、その解決の物的條件がすでに存在して居るか、あるひは少くとも其生成の過程にあるかの場合にのみ、はじめて發生するものだから。」

1) 本誌一月號拙稿『新國民主義と國民共同體』參照

と述べて居るが、このことはマルクスがその物的生産力の必然史觀の立場より述べて居るのである。而も、我々はこれを國民生命史觀の實踐的立場に於て擴張して考へなければならぬ。即ち社會の變革期に於てはより高き制度を實現する爲めの單に物的素材のみならず、實踐的四要因が現存の國民的實在の中に準備されるのである。ヘーゲルはその史觀に於て先づその主體を明にしたる後神の實踐の四要因を明にして居るのであるが、我々はこゝに社會の變革期に於て人間的實踐的なる四要因の準備されて居ることについて考察するのである。

—先づ目的因について述べよう。

國民史觀の主體がかくの如き國民的生命であると云ふことから、國民的發展の意義なるものが規定される。即ちそれは、國民を構成する總ての人々が人間的自覺に高められ、人間的活動を享け得るに至ると云ふことである。而もかくの如き目的因は國民的發展を通じて究極に於て實現さるべきところのものである。各段階の變革の直接の目的因となるところのものは、その段階に於ける國民的生命の要求である。即ちこの國民的生命の要求なるものは、この發展段階に於ける國民的生命がその發展の爲めに必要とするところのものである。例へば古代社會の末期に於ては、治安の維持と云ふことが國民的生命の要求となつたのであつて、これを目的因として、武力的支配の秩序を原理とする封建社會への古代的民族的社會の變革がなされたのである。また封建制度の末期に於ては人間の自由博愛平等と云ふことが國民的生命の要求となり、これを目的因とすることによつて封建社會の身分的差別に基く命令服従の關係が打破せられ諸文化域に於ける自由平等を原理とする現代の市民社會が打立てられたのである。この市民社會の末期に於ては、益々激化し行く經濟的階級分裂が大多數の國民の生活を壓迫し行くが

1) Marx. Zur Kritik der politischen Ökonomie. Vorwort.

故にこれを打破して眞に國民全體の生活を充實することが、國民的生命の要求となり、これを目的因として現代の變革が爲されんとしつゝあるのである。

かくの如く、國民的生命がそれが爲めに變革をなすところの目的因は既存の制度の末期に於て高まり來る國民的生命の新たな要求として、國民的存在の中に準備されて居るのである。

次に國民的生命がそれに依つて自己の要求を實現するところの手段としての動力因についても、既存の制度の末期に於て準備される。即ち既に述べたるが如く、これは國民的生命の新たな要求に應ずるところの階級であつて、この階級は國民的生命に支持されて高まり來り、これまでの支配階級に代つて支配的地位に上り、既存の制度を變革して新たな制度を成立發展確立せしめ行くのである。古代社會の没落期に高まり來れる武家階級、この武家階級により打立てられたる武家社會の没落期に高まり來れる市民階級、この市民階級によつて打立てられたる市民社會の没落期に於て高まりつゝある生産者階級ことに農民階級は、何れも既存の制度の下に於て準備されたる變革階級である。

次に新なる制度がそれに於て現實さるべき素材因もまた既存の制度の下に準備される。前掲のマルクスの語は經濟的生產力を新な社會の推移の條件として重んじ従つてこの生產力の決定條件としての生産的なる物的諸條件を重んじたのである。このことは國民生命史觀の立場に於ても重要である。即ち新な制度はより高き經濟的生產力の上に於てのみ實現し得るのであつて、この生產力は既存の制度の下に於て準備されるのである。而して經濟的生產力の發展は生産財並に生産設備の進歩に拘るが故に既存の制度の下に於て進歩せしこれ等物的諸條件がよ

1) 本誌前號拙稿『國民生命史觀』參照。

2) 本誌本號第五頁參照。

り高き生産力の土臺をなすのである。かくて例へば現代の市民社會は封建制度の下に於て準備されたる物的生産力の上に實現されたのであるが、この市民社會の下に於て高められたる物的生産力を土臺として更に高き制度が實現されるのである。而もより高き制度に推移する爲めの物的諸條件の進歩は單に生産財についてのみならずまた直接人生に役立つべき諸種の消費財並に設備についても必要である。マルクスもまたこのことを述べて居る。¹⁾

既存の制度が新なり高き制度へ變革される爲めのより高き物的素材が、既存の制度の下に於て準備されて居るのみならず、人的素材も亦準備されて居るのである。例へば、中世の武力的支配は、古代社會に於て主として民族的感情に於て統一されて居た人々を、國家的な命令服従によつて訓練したのであつて、この人々が近世の私有權其他複雑なる法律的秩序を土臺とする市民社會制度の人的素材となるのである。更にこの市民社會制度の下に於ける各人の自由なる生活により自覺的に高まり來れる人々が、來るべきより高き制度の人的素材となるのである。

既存の制度の末期に於ては更に新なる制度の形相¹⁾も準備されるのである。即ち次の時代に於て支配的となるべき制度の形相は既存の制度の下に於て次第に高まり來る。例へば古代の民族的制度より中世的封建的制度への變革に當つては、既に古代の末期に於て莊園なるものが成立發展し來つたのであつて、このものは不輸入の特權を有し法律上の領主權を具備しそれ自體に於て權力的支配の構造を有するものであるが、この莊園なるものを土臺とすることにより次の時代の封建制度なるものが成立したのである。また封建制度の末期に於て發展し來れる都市の制度なるものが、次の時代の市民社會制度の土臺を爲すのである。この市民社會制度の末期に於てカル

1) Marx, Deutsche Ideologie.

テル、トラスト、産業組合、勞働組合等の諸種の協同體的制度が發展し次第に國民單位にまで擴大し行くことは、次の國民共同體を準備することゝなるのである。

かくて一時代の末期に於ては、新なる制度を實現すべき目的因、動力因、素材因、形相因が諸の可能性と共に準備されて居るのであつて、主體たる國民的生命は、客體たる現存の國民的實在に於てあるこの諸要因を實現することによつて新なる制度を實現し、この下に於て、自己の新なる發展の可能性を實現し行くのである。

四、國民生命史觀に於ける實踐の諸様態

マルクスの唯物史觀に於ては、物的生産力が高まり來るならば、それはその發展の一定の段階に於て現存の生産諸關係と必然に衝突しこれを變動し「經濟的基礎の變動につれ、巨大なる上層建築の總ては、あるひは徐々にあるひは急速に變革する」のであるが、人間的實踐的なる變革に於ては、その變革發展はかくの如き必然たることを得ない。即ち國民的生命は、現存の國民的實在に於てある諸可能性の中より生命の新なる發展に適合する新なる制度を成立せしむべき目的因、動力因、素材因、形相因を實現し、この新なる制度の下に於てその新なる發展をなすのであるが、このことは自覺的にまたは無自覺的になされるのである。

即ち國民的生命が現存の制度の下に於ては、も早や發展を続け得ざることを自覺し、而もこの制度を變革し新なる制度を實現する爲めの目的因、動力因、素材因、形相因が既に準備されて居ることを洞察し、これ等のものを統一することによつて新なる制度を實現すべき道を思惟し、この思惟に即して新なる制度の實現を實現するこ

とが自覺的なる變革である。これに反し無自覺なる變革に於てはかくの如き全般的なる洞察を缺くが故に、既存の制度を自己の利益の爲めに保持せんとするところの既存の支配者階級とこの制度を自己の利益の爲めに變革せんとする被支配階級との利己主義的なる階級闘争が激しく盲目的に行はれる。この際前者が勝つならば、國民的生命發展の桎梏となれる既存の制度が保持されることにより、生命の發展が阻止されることとなる。また後者が勝つとするも既存の制度を打破するのみにして新なる制度を打立て得なければ、國民的命は發展し得ざることとなる。かくて事實人類史上に於て多くの國民は衰亡の道をたどつて行つたのである。只だ後者が勝ち既存の制度が破壊せられ而も幸にその下に於て國民的生命が發展を続け得べき新なる制度が打立てられるならば、こゝに國民的生命は新なる段階に進み入る。而もこの盲目的な激しき階級闘争の爲めに國民的生命力が浪費されることは莫大であつて、爲めに新なる段階に於ける生命の發展は十分なるを得ないのである。それは例へば、肉體的生命が悪質の病に冒されこの病についての醫療の知識なき爲めに生命が大なる障害を被り、その病の癒えし後も十分なる生活力を恢復し得ざると同様である。かくの如く無自覺的變革には大なる犠牲を伴ふのであるが、人類文化が進み社會の構造が複雑となるにつれこのことは益々大となるのである。かくて國民的生命の發展を完ふせんとせば、自覺的實踐的になさるゝことが益々必要となるのである。これを歴史上の事實について見るも、歴史を溯る程變革の事情は簡易であり無自覺的になされて居るのであるが、近世に及ぶ程事情は複雑となり益々自覺的になされて居るのである。

かくて變革が自覺的實踐的になされんが爲めには、この變革に關する思惟につきまたこの思惟の實行につきこ

れを指導する自覺者が必要となる。マルクスが「哲學者は頭腦でありプロレタリアートは心臓である」と述べた「世界を變革する」哲學者は、社會主義的立場に於てではあるが、この實踐的思惟を指導するところのものである。これに對しヘーゲル史觀に於ける「英雄」又は「世界史的個人」は、國家主義的立場に於てであるが、主としてこの實行を指導するところのものである。而して國民生命史觀の立場に於てもその實踐的思惟とその實行とを指導するところのもののあることが自覺的變革の爲めに必要である。而も國民共同體の鞏固なる國民に於ては、この共同體の中心が中核となつて全般的自覺的なる變革が行はれ易いのである。即ち國民共同體の弱き國民にあつては變革に際しての階級的對立はその地盤たる國民共同體自體を分裂せしめ、激しき階級闘争に陥るのであつて、その例は封建社會より市民社會への變革については佛蘭西大革命に於て最も典型的なるものが見られる。また市民社會の變革については、ロシア革命に於てもその例が見られるが、現に行はれつゝあるスペイン革命はその典型的なものである。かゝる革命は國民的共同感情を分裂破壊せしめ、從つて反動革命の危險を伴ひ、かくて國民的生命力は甚だしく浪費されることゝなるのである。これに反して國民共同體的構造の強きものにあつては、階級對立がこの國民共同體を地盤としてなされ、變革はこの共同體の中心を樞軸として自覺的に展開する。從つて前者に於けるが如き革命に伴ふ國民的生命の大なる犠牲がない。國民共同體的地盤の特に鞏固なる我國民の歴史上に於ける變革については大化の改新に於ても、明治維新に於ても、その典型的なるものが見られる。即ちそれは皇室を中心とするところの自覺的なる變革である。

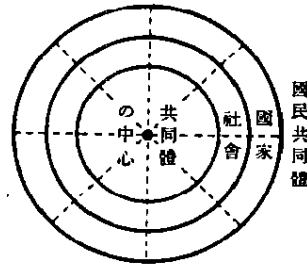
五、國民の發展的構造

以上に於て國民的變革の構造を明にしたが故に、次にこの變革の構造を通じて發展し行く國民的生命の發展的構造を明にしよう。この爲めに先づ國民の發展的構造なるもの、認識論的性質を明にする。

デイルタイは個人についても諸種の文化體系についても、發展的構造を明にして居るのであるが、國民についてはこれを不可能とするのである。即ち文化體系について彼は次の如くに述べて居る。「各の文化體系 *Kultur-systeme* はその働き、その構造、その法則性の基礎に於て一つの發展 *Entwickelung* を有する。出來事 *Ereignisse* の具體的なる經過に於ては、發展の法則 *Gesetz der Entwicklung* なるものは見出し得ないが、この具體的なものを個々の同質的作用聯關に分析することは、諸状態の繼續の洞察を與へる、これ等諸状態は內的に規定され、相互に前提し合ひ、かくて云はゞ、より低き層の上により高き層が建てられて、分化並に聯關の増大に進み行くところのものである」¹⁾ かくの如き發展の構造は發展的典型 *Entwicklungsidealtypus* と云はるべきものである。即ち文化體系は一つの作用聯關であり總て作用聯關は內面的目的性 *die immanente teleologische Charakter* を本質とするものとして、この目的性を遺憾なく發揮し得る状態に於てこれを考察することによりそのもの、構造が典型 *idealtypus* として明にされる。デイルタイが *der ideal Falle, in welchen die Leistung vollständig verwirklicht ist* の業績が完全に實現される理想的な場合」と云へるは即ちこれである。發展的典型と云へるものは、これを發展の構造の究明に適用したものであつて、その內的目的性が完全に發揮されるが如き發展の構造を求めるのである。

1) Dithey. ges. Schrift. VII. S.

前述せし如く¹⁾事實上に於ける國民の發展は常に液落の可能性を有するものであるが、而もこれにつき發展的典型が明にされ得るのは、國民なるものが、それ自身として一つの内面的目的を有する作用聯關であるが故である。國民なるものゝ本質は、既に明にせし如く、そこに於て人間か人間としての完成を果げるにある。故にそこに於てある總ての人々が人間としての完成を果げ得ると云ふことがその内面的目的の「完全に實現」されることである。この爲めに國民社會が果げるべき發展的理想型を明にするならば、これが國民なるものゝ發展の構造である。而してかくの如き國民の發展的理想型なるものは、國民的存在の諸類型を、國民的生命の發展完成の順序に應じて統一することによつて明にされ得るのである。



國民的存在の構造は、國民的共同感情によつて共同體的に統一されて居る人々が更に、國家並に社會の制度によつて構成されて居るところのものであつて、これを圖形に示めせば上圖の如くである。故に前述せしが如く今この國民的構成要素の各々を別々に高調したる諸種の場合を考へるならば、こゝに國民的存在の諸類型が明にされるのである。即ち國民共同體の支配的なるものと、國家的要素の支配的なるものと、社會的要素の支配的なるものとがこれであつて、國民共同體の支配的なるものについては更に、國家並に社會の未分前のものと、これ等の分化發展せしものとが區別さる。

これ等國民の類型は、これを國民の各時代として考へる時、それ自身獨特の文化的意義を有すること前述せしが如くである²⁾。即ち時代なるものは *die Konzentration der ganzen Kultur eines solchen Zeitraum in sich selbst*.

1) 本號第二頁以下參照。
2) 拙稿『新國民主義と國民共同體』本誌一月號第一六〇頁以下參照。

「二つの時間の全文化をそれ自身に中心する」ところのものである。かくて未分前の國民共同體は、古代社會に相當するものであつて、そこには民族的感情が支配的原理となり、情緒的な文化が創造された。また國家的要素の支配的なるものは武力が支配的原理となつた中世の封建時代に相當するものであつてそこに於ては諸種の意志文化が發達した。社會的要素の支配せる型は、近世の市民時代に相當するものであつて、そこに於ては經濟力が支配原理となり諸種の合理的文化並に社會的生産力が發達した。具體的なる國民共同體に於て國家的要素も社會的要素も發達し而してこれ等のものがその根底としての國民的共同感情によりて内面的に統一されて居るところのものであつて、こゝに於て眞に全國民的なる文化が發達するのである。

かくの如く國民的存在の諸種の類型はこれを各時代として考察する時は、それ自身に中心して居るものであるが、これを國民的生命發展全體の一段階として考察する時、この全體に於て意義聯關 *Bedeutungszusammenhang* を構成して居るのであつて、國民的生命なるものはこの發展的聯關を通じてはじめて完成されるのである。

即ち未分前の國民共同體は、云はゞ *an sich* の段階に於ける國民共同體であつて、そこに於ては貴族階級のみが人間の生活に高められ他の人々は尙ほ低い生活に止まつて居るのである。この *an sich* の段階が *an und für sich* の國民共同體にまで發展せんが爲めには、先づ國家的要素が發達して國民生活の秩序が確立され、次に國家秩序の土臺に於て諸種の文化域又は文化社會が自由に發達して人々の自覺が高められなければならない。かくてこの二つの段階は *an sich* なる國民共同體より *an und für sich* な國民共同體に至るところの *für sich* な發展段階をなすのであつて、前者は全體主義又は國家主義の支配する中世の封建的段階であつて、こゝに於ては武士階

2) Dilthey, Ges. Schrift. VII. S.

貴族時代 武家時代 市民時代 國民時代



級が更に人間生活に高められ、後者は個體主義又は個人主義の支配する近世の市民時代であつて、こゝに於ては更に市民階級が人間生活に高められる。然もこゝには所謂 *the Great body of the people, that is the labouring poor* 「國民の大多數即ち勞働せる貧困なるもの」が尙ほ人間生活に高められずして残つて居るのである。 *an und für sich* の國民共同體に至つてはじめて國民的共通愛が支配的となり總ての人々が人間生活に高められるのである。

かくの如く、國民的生命が發展完成して總ての人々が人間生活に高められると云ふことは、國民的在展の貴族時代、武家時代、市民時代を経て眞の國民時代に於てはじめて可能となるのである。これを圖形に現らせば上圖の如くである。

以上に於て私は、國民的發展の基本的構造を、最も具體的な國民即ち國民共同體の鞏きものについて考察した。この基本的構造は更に類型化されなければならないのであるが、このことは次の世界史的構造の考察に於て爲される。

六、世界史的發展的構造

國民なるものは、孤立的にあるものではなく、世界史的聯關に於てあるものである。故に歴史的社會的實在の本質的構造論は、國民の史的發展的構造論に終るべきものではなく、この國民史の聯關にまで進まなければならぬ。

この世界史の發展的構造の考察について先づ注意すべきことは、ヘーゲル史觀がこれを空間的に考察したるに對し、マルクス史觀がこれを時間的に考察したることである。即ちヘーゲルは、「歴史は……直接的自然的實在に於ける精神の形成あるが故に、發展の諸段階は直接的自然的諸原理として存在し、此諸原理は自然的であるが故に、多數性として互に排他的にある」と述べ、各民族は各々この自然的諸原理の一を擔當しこれを發展させるものと考へた。かく國民を自然的原理の擔當者となし國民性の相違を自然の相違の中に見たヘーゲルにとつては世界史の發展は、世界精神の發展段階に相應する民族が空間的に順次に世界史的支配に上り來る歴史であつて、世界史は東洋の諸國よりはじまり、ギリシヤ、ローマ、を経て西歐諸國に至つて終るべきものとして考へられたのである。而して國家も社會も諸種の文化もそれらの國民に特有なものであつて、共通的なものはないと考へたのである。¹⁾

これに對してマルクスは、時間的發展的構造の各國民に於ける共通性を重んじて曰く「こゝでの問題は、これ等の法則自體であり、鐵の如き必然性をもつて作用し自己を貫徹するこれ等の諸傾向である。産業の比較的發達した國は、發達の後れた國に對して、かゝる國自身の將來の姿を示すにすぎない。」²⁾かくて國民を相違せしむる空間的原理はマルクスにとつては重要なものではない。而も國民生命史觀はこの點に於ても兩者を止揚統一しななければならぬのである。

即ち國民的生命が貴族時代、武家時代、市民時代、國民時代へと發展し以て自己を完成すると云ふ時間的發展的構造は何れの國民についても變りないのであるが、國民なるものは地球上に於ける異なる空間を土臺として

1) 拙稿 『ヘーゲル史觀の實踐的構造』參照

2) Marx. Das Kapital. Vowort.

發展し行くものとして、共通なる時間的發展的構造を特殊化する空間的原理を有して居るのである。この空間的原理は國民の自然と血と歴史とによつて決定されるところの國民性の相違として世界的舞臺に現れる。

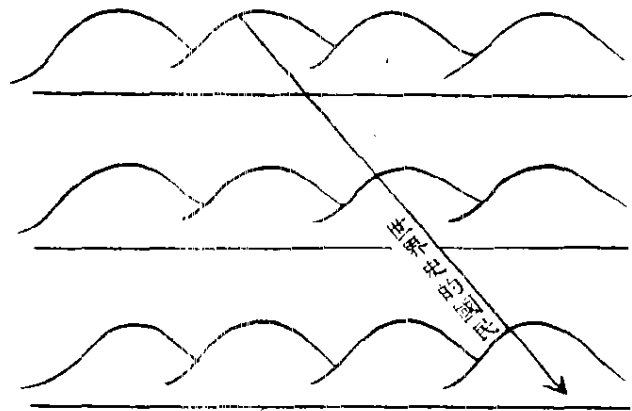
今國民性の相違を、類型的に、意志的なるものと、理智的なるものと、情緒的なるものとに分つならば、現存せる國民に於てはその代表的なるものを、第一のものについては獨逸國民に、第二のものについては英國國民に、第三のものについては日本國民に於て見ることが出来る。この國民性の相違によつて國民の發展的構造が類型化される。即ち意志性の強き國民に於ては、國民生活の意志の面としての國家生活があらゆる發展段階を通じて強く現れる。また理智性の強き國民に於ては、國民生活の理智面としての社會生活が、あらゆる發展段階を通じて強く現れる。また情緒性の強き國民に於ては、國民生活の情緒的の面としての共同體的生活が、あらゆる發展段階を通じて強く現れる。このことは歴史上の事實としては獨逸、英國、日本の歴史を比較對照することによつて見られる。

かく國民性の異なるによつて發展の構造が類型化されると共に變革の構造もその各々に於て類型化される。即ち社會生活の支配的な國民に於ては國民的變革は、下より社會階級の利己心の働によつて主としてなされ、國家生活の強い國民に於ては、主として上よりの國家意志の發動によつてなされる。然るに國民共同體の強い國民に於ては、國民共同體を土臺として爲される。今これを封建社會より現代の市民社會への變革の歴史的事實に見れば、英國に於ては大憲章名譽革命等に於て見られるが如く、市民階級的要求によつてなされたに對し、獨逸に於てはプロイセンを中心として國家意志を主動力として爲されたのであつて、ビスマークの政策はその顯著なるも

のとして見ることも出来る。その經濟學的表現は英國の社會經濟學に對して國家意志の働を高調した獨逸の歴史派經濟學に於て見ることが出来る。然るに我國に於ける變革は獨逸の諸侯に相當する各藩の諸侯によつてなされたのでもなくまたこれ等諸侯の長としてのカイザーに相當する將軍によりてなされたのでもなく、一度この將軍を否定し我國の國民共同體の中心としての天皇を中核としてなされたのである。單に明治維新の變革についてのみならず、國民共同體の地盤の鞏固なる我國民史に於ける大變革は大化の改新に於ても皇室を中心としてなされたのであつて、また古代社會より封建社會への變革に於ても武力的支配者としてカイザーに相當する將軍が皇室を否定することなく、反對に將軍が皇室より任命される形をあくまで保持して封建時代を通じて國民共同體の中心としての皇室の存在が一貫したことは、他の歴史に見られ得ざる我國民史の共同體的構造である。

世界史の發展的構造は、かく異なる發展的類型を有する諸國民の作用聯關として明にされるのであるが、世界史の各時代に於ける諸國民の聯關の仕方は、國民史の各時代に於ける一國民内の人々の聯關の仕方に相當する。而して一時代の世界史を支配する世界史的國民なるものは、その國民性の原理がその時代の原理に一致する國民である。即ち意志的は原理の支配する中世時代に於ける國民の聯關の仕方は、一國民が他國民を意志的權力的に支配する國家主義的聯關であつてかゝる時代には意志性の強い國民が支配的地位に上るのである。その典型的なるものは中世の神聖ローマ帝國に於ける獨逸民族の支配に於て見られる。理智的な原理の支配する市民社會時代に於ては、經濟的に秀れたる諸國民が經濟的に劣れる諸國民を經濟的に搾取するところの諸國民の階級分裂的構造が世界史の構造を決定し、理智的打算的な國民が支配的地位に上る。今日の世界の狀態は正にこれであつて、

貴族時代→武家時代→市民時代→國民時代



意志的國民 理智的國民 情緒的國民

そこには英國民が日没するところなき大英帝國を打立て、居るのである。かくの如き國民と國民との間に於ける權力的又は經濟的支配ではなく、各國民が相互に人格的尊重に於て結ばれる諸國民の聯關の構造は人類愛が支配的原理となる時代に於て見られるのであつて、これが眞に具體的なる人類社會の構造である。而してかゝる時代に於て支配的地位に上り來るものは愛の原理に於て秀れたる情緒的國民でなければならぬ。今この世界史の發展的構造を圖形に現はせば、上圖の如くである。

この世界史の一時代より次の時代への變革の構造も、國民史のそれに相當するものである。即ち國民史の封建制度の下に於て個々人が自覺的に高まれることかその崩解の土臺をなしたが如く、世界史に於ける封建的構造もその下に於て自覺的に高まり來れる諸國民が各々國民國家を形成することによつて崩解し、世界史の市民社會時代に進み入つたのである。この市民時代に於ける諸國家の經濟的利己心による自由競争の結果は諸國家間に經濟的なる不平等を齎らし、ことに絶對有限なる人類自然富源の先進國民と後進國民との間に於ける極めて不平等なる分配を齎らした。各國民に於ける人口の増大に伴ふ經濟的必要は、後進國民に於てその經濟的限界ことに自國民の支配し得る自然富源の限界についての不満となつて現れ來り、戰爭の危機を伴ふこととする。

この戦争の準備の爲めに各國民が必要とする經濟力は、相互の軍備競争によりて、殆んど無限なるものとなる。この無限なる經濟的必要は更に後進國の經濟的有限性についての關心を高め、戦争の危機を愈々強め行く。かくて今や一切は戦争の爲めの手段と化し去らざるを得ない勢にあるのである。こゝに世界史の市民社會時代は、その歴史的限界に到達したのである。

この世界史の市民的國際關係を打破し被搾取的地位にある國民を解放し、新なる世界經濟の原理の上に各國民が相互の國民人格を尊重し、その各々の個性に基く文化を自由に發露し以て眞に具體的なる人類文化を創造すべき新なる時代を將來せんが爲めには、こゝに世界史に於ける支配的國民の交代がなくてはならない。今や世界の市民社會的構造が變動しはじめると共に英國の支配的地位も動搖し始めたのであるが、この英國に代つて來るべき眞に國民主義的なる世界時代の建設を指導する國民は、眞に人類愛に富める情緒的な國民でなくてはならない。こゝに日本國民の世界史的使命がある。而もこの使命は必然史觀に於けるが如く、自然必然的に實現さるべきものではなく、日本國民の眞の叡智と努力とによつてはじめて實現し得るものである。今日の日本が依然市民社會時代の意識に把らはれてその支配的國民の仕方の模倣を繰り返し根本的なる自覺を缺ぐならば、日本國民がこの世界史的使命を實現すべき時機は永久に過ぎ去らざるを得ないのである。